

竹林公園から移された2つの石仏

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 竹林公園から移された石仏2体

左：墨書をもつ阿弥陀如来坐像 高さ68cm、幅42cm、厚さ23cm、右：「清明」銘 阿弥陀如来立像 高さ65cm、幅47cm、厚さ25cm

竹林公園の石造物群 西京区大枝北福西町に所在する京都市洛西竹林公園の一角には、地下鉄烏丸線の調査で出土した石造物361点が設置されており、これらは「旧二条城関係の石造物群」として京都市指定文化財に指定されています。旧二条城は永禄12年(1569)に織田信長が将軍足利義昭のために築造したのですが、築城に際し石仏や石造物を壊して運んだことがキリスト教宣教師によって記録されています。竹林公園に並べ

られた石仏216体中に壊された痕跡がみられることは、その裏付けでもあります。

東端を囲うように並べられた石仏の中でも南端の2体は、線刻・墨書をもつことから特に珍しい石仏として知られていましたが、屋外展示を続けることさらに劣化が進む懸念があり、関係機関が協議した結果、当館に保管替えとなりました。

墨書をもつ阿弥陀如来坐像 各部に墨で線を入れた珍しい石仏で

す。石材は花崗岩製で、石材を割り出した際の矢跡が、左側面と底面に残されています。仏像の種類は「阿弥陀如来坐像」で、光背の前に厚肉彫りで表現されています。頭頂部が一段盛り上がった「肉髻」は如来形であることを示します。左右の耳は墨線で描かれ、首の三道も墨線で描かれます。袈衣は、右肩の一部と左半身を包んだ「偏袒右肩」で、右肩と左半身のひだを墨で描きます。胸の筋内下の輪郭も墨で描きます。両腕を膝上に

置いて「阿弥陀定印」を組み、指を墨で描きます。脚を組んだ「結跏趺坐」を表し、袈衣のひだを墨で描きます。下方が尖った不安定な台座には、蓮弁を墨で描いた「蓮華座」を表現します。

顔の左右にも蓮弁と墨の広がり認められ、蓮華座の上に梵字がすわる圖案を描いたと考えられます。左耳横は「観世音菩薩」の種子（梵字一字で仏を表す）「唵」^{オン}、右耳横は「勢至菩薩」を示す「唵サク」であり、左右に脇侍を配置した阿弥陀三尊の石仏であったといえます。「唵」の下に描かれた楕円は、観世音菩薩が信仰深い人を極楽に引接する際に差し出す蓮台を示すと思われる。

この石仏は、烏丸通と出水通の交差点付近から出土しましたが、ここは旧二条城北面の中央東寄りに当たり、東西方向の堀が掘られた後、埋められて南北方向の通路が形成されたことや、石仏は堀を埋める際にまともに入れていたことが調査で判明しています（写真2）。

「清明」銘阿弥陀如来立像 この石仏についてはリーフレット京都No.176で詳しく紹介されています。立像として造られ下半を欠損しましたが、底面を平坦に整えることから、割れた後も信仰対象となっていたようです。仏身の肉彫りは他の石仏より厚く、鎌倉時代に作られたとみられます。

出土地点ですが、リーフレット京都には「烏丸通と上長者町通の交差点部分の烏丸通東側歩道沿い」とあります。しかし実際にはそれ

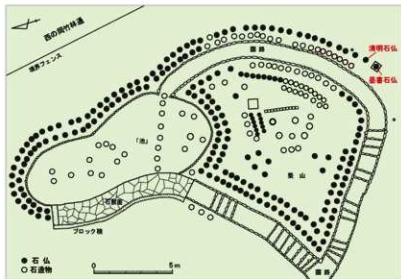


図1 竹林公園の石仏・石遺物配置状況

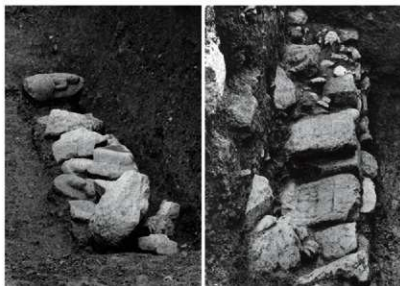


写真2 墨書をもつ石仏出土状況

『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 1976年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980より

写真3 「清明」銘石仏出土状況

『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ 1974.75年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1979より

より約80m北側の調査区から出土しており、この間には烏丸通東側溝の東側石垣が連続して検出されていることから、リーフレット京都を作成する際に誤記が生じたようです。

なお、写真2・3の石仏出土状況写真からは2つの石仏を特定することは叶いません。

おわりに 竹林公園に設置された石仏は216体を数えますが、そのうちの約8割が阿弥陀如来像です。しかし線刻で文字を入れたり

墨で線書きした石仏は他には認められません。顔の左右に梵字を配置して阿弥陀三尊を表現することも、他の石仏と異なります。2体の石仏には特別の想いが込められていたのでしょうか。

織田信長が京都に入り始まった安土桃山時代は、華やかな反面、戦乱の時代でもありました。信長が築かせた旧二条城跡と内裏の修繕に使用された2体の石仏は、前時代の庶民信仰を示す確実な遺品といえます。（丸川義広）